

戦争を知らない世代へ ⑤⑥ 長野編

飢えと炎の島—トラック島

長野県出征兵士の記録

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ㊦

飢えと炎の島—トラック島——長野県出征兵士の記録

昭和54年10月31日 初版第1刷発行 定価 1300円

編者◎ 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 栗生一郎

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

振替 東京5-117823 電話03(294)8731(代)

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社星共社

落丁・乱丁本はお取り換え致します
1979 Printed in Japan

0036—7056—4438

発刊の辞

昭和四十九年五月に第一巻を発刊した「戦争を知らない世代へ」シリーズも、この「飢えと炎の島——トラック島」(長野編)をもって全五十六巻を締めくくることができ、誠に喜ばしい限りである。

戦時中、信州は東京の戦火を逃れてきた人たちの疎開地であり、かけがえのない食糧供給の地であった。焦土の東京を離れてこの信州の地に立った時、静かな山々と緑なす田園に、初めて安らぎのひとつを覚えたという人は多い。今でも当時の回顧談のなかに信州のことが語られるという。

私は以前に松代を訪れたことがある。終戦間近、本土決戦に備えて大本営を安全な場所に移すことになり、その候補地選ばれたのが松代であった。昭和十九年十一月に着工し、九カ月を要して象山を中心に四方に張り巡らされた一万三千六十九メートルにおよぶ地下道は、東京の後楽園球場の四倍の広さという広大なものであった。結局、日本は降伏したため、大本営の移転は中

止となり、今はその一部が地震観測所として使用されているに過ぎない。山のふもとにぽっかりと口を開けた洞窟は、今、草木が生い茂り、そのなかから追いつめられた日本の悲哀の声が聞こえてくるようであった。敗戦の終末がそこに象徴されていた。

長野県は直接、空襲によって多くの犠牲を被ったという例は少ない。しかし、けっして平和ではなかった。この信州の地より、多くの兵がはるか南方の島や中国東北地方へと召集され、異国の露と消えていった。わが子を失った父や母、また父を亡くした妻や子の悲しみはいかばかりであったろう。山の端に沈む落日の残照を眺めては、亡き父やわが子の姿が目に見え、涙ではおを濡らしたという。来し方を振り返りながら、静かに語る年老いた「母」の声を耳にしながら、私は、「この悲しみをけっして風化させてはならない。この悲慘な戦争体験を未来へと継承していかなければならない」と決意を固めた。

今回、私たちはトラック島の戦争体験集を企画したが、どうして長野県と結びつくのかと疑問に思う人もいると思う。それは当時、中部太平洋の中心基地であったトラック島に出征していた兵の多くが長野県の出身者であり、戦死者以上に餓死者が多かったという、例を見ないほど陰惨を極めたこの戦争の実態を明らかにしようと思ったからである。

こうした趣旨に十分意にならなかったものとはいえないが、山本茂実氏をはじめ多数の御協力をいただき、ここに発刊することができたことを心より御礼申し上げます。また、本書の編集

に携ったメンバーの労に対し深く感謝するものである。

昭和五十四年十月十二日

創価学会青年部
長野県男子部長 岡松 憲史

目次

発刊の辞

目の前で二十数人の仲間が爆死……………	柴田今朝太郎	11
極限の飢餓状況におかれて……………	久保田邦武	24
海に散った百二十二名の戦友……………	小林村吉	31
雨のように降りそそぐ爆弾……………	湯本千代治	42
闇にこだます友の声……………	大藏浜雄	51
死の淵で見た母の面影……………	笠井深司	58
目に浮かぶ亡き友の笑顔……………	清水智吉	71
永遠に忘れられぬ残虐の日々……………	古川伊勢夫	77
南海の楽園が死の島に……………	故・鮎沢作治郎	80
ネズミが最高の食糧……………	寺島政之助	85

必死の漂流五時間……………	村田重蔵
海戦に生き残りトラック島へ……………	牛沢輝雄
ヤシの木に救われた……………	岩井今朝雄
機銃掃射の中を走り抜ける……………	山浦文市
輸送船「辰羽丸」の最期……………	立野渥孝
今も戦友のひとことが耳に……………	正沢兼蔵
爆撃と夜盗虫でイモ畑も全滅……………	岡田揚三
隣りの友が朝には冷たい体に……………	西村直人
爆弾が防空壕の真上を直撃……………	両角 厳
残酷な救助打ち切り……………	横内村一
生命に焼きついた亡き友の声……………	武井貞美
運命の日「2・17」……………	牛山忠四郎
海に消える叫び声……………	野沢善之助
海岸にならぶ餓死者の山……………	手塚利勝
食糧難でトカゲをさがし回る……………	漆戸定喜

戦闘より苦しい飢えとの闘い……………	加藤政義	193
フンドシをしたガイコツの集団……………	夏目益一	198
民間人までが目の前で……………	栗沢佳年	204
しごきと空腹の中で……………	本島喜八	213
悪夢の島へ三十三年後に訪問……………	鈴木義一	219
目を覆う直撃弾の惨状……………	橋本 悟	226
特別寄稿 南十字星に哭く……………	萩本寿男	233

座談会 二度と戦争のない世界に

あとがき

年表・戦局とトラック島戦史

当時のトラック諸島



飢えと炎の島——トラック島

——長野県出征兵士の記録

目の前で二十数人の仲間が爆死



柴田今朝太郎（56歳）

昭和十九年一月十日、私は第一補充兵として、金沢第五十五部隊へ赤紙一枚で召集され、補給中隊へ入隊した。翌朝より、今まで触れたことのない馬の世話の明け暮れは、私にとって大変つらいものだった。明け方の起床ラッパで起こされ、顔を洗う時間も、食事の時間も、わずかな数分間。そのあとすぐに、戦闘訓練が始まるという今までにない毎日だった。この地獄のような日課に耐えられず、訓練途中でだめになる者が多く出た。大学出身の者が隊から逃亡して、寺の縁の下や山で自殺するということがあったのもこのころだった。

そのようなころ、私はある上官の話を耳にした。それは、トラック島が大爆撃にあい、飛行機、船などが全滅したらしい、ということだった。私は入隊まで徴用工として、名古屋三菱航空機で日本最大の爆撃機や、水上機の製作に懸命に働いていたこともあって、その大切な飛行機が破壊されたのかと思うと、くやしくて仕方がなかった。

三月中旬に、私たちはいよいよ第一線へ送られるという噂が広がり、こんど出征したら、もう

生きては帰れないだろうと思うと、重苦しい毎日だった。行く前に両親にだけは会いたいと思っても、それもかなえられない。家族にもいっさい秘密の行動であった。

三月末、私たち兵隊には行く先はまったく知らされないまま、出発することになった。

夜中に列車で金沢を出発し、着いた所は横浜だった。列車の中では、人との話はいっさい禁止され、ただ黙って座っているだけの重苦しい空気につつまれていた。私たちが乗る船が集結するまで、鶴見で一週間待機したが、その間に半袖の服が支給されたので、私たちの行き先は南方に間違いないとわかった。

四月初旬、東京湾に一万トン以上の船ばかり約五十隻が集結し、私たちはその中の「甚山丸」に乗り込んだ。船の中は兵員でいっぱいだった。

船から見える日本の陸地も小さくなるころ、郷里に残してきた両親と兄弟を思い、日本の島影を見ては、一人で泣いた。すでに何万人もの日本兵が、日本を離れる時、このような思いをしたのかと思うと、ますます涙が流れた。

日本の島影がまったく見えなくなると、広い太平洋を走る五十隻の輸送船と、護衛艦十数隻の船団がとても大きなものに感じられ、太平洋いっばいに広がっているかとさえ思えた。船内ではそれぞれが任務につき、私は視力が良いということで、対潜監視をやるようになった。五百倍の双眼鏡で、たえず敵の攻撃を昼夜にわたって監視していた。

しばらくして、小笠原を過ぎるころ、輸送船が沈められたらしく、竹のいかだや、味噌だる、板切れ等が無残に漂っているのが見えた。沈められた船の兵員は、おそらくサメやフカに、引きずり込まれて死んだのだろうと、口々に話し合っていた。海を見ると、死んだ軍人たちの悲壮な声が、海の底から聞こえてくるようであった。

乗船して五日目ごろから、敵の潜水艦が出没するようになり、まったく生きた心地はなかった。そのつど、爆雷を落としながら、全速力で進んだ。自分自身では、どうすることもできないのはわかっていても、絶対海では死にたくないかと祈らずにはいらなかった。

夜になると、南方特有の夜光虫が高いマストにまでつき、私は、はじめて目にしたこの青白い光が不気味でさえあった。

昼間、船の中を見渡すと、皆、シャツを脱いで何もかも忘れたように、シラミ取りをしていた。私は対潜監視という、何千人もの生命を預かる大切な仕事についていたため、かゆいの、いたいものといっではいられない。

七日目にして、やっと島影が見えてきた。近づくにつれて、島がはっきりと見える。美しい。地球上にこんなにも美しい所があったのかと、夢のような気がした。空はあくまで澄んで青く、海岸線は白く、ヤシの木は緑に茂り、まるで絵を見ているようだった。このすばらしい景色を見ると、戦争とどうしても結びつかなかった。

思えば、金沢での三カ月間は、毎日黒い雲の下で生活していたのに、半月足らずで一挙に別世界へ来たようだった。

この島はサイパン島だった。戦況が悪く、トラック島へは直行できないということで、一時、この島へ上陸し、ようすを見てから、ふたたびトラック島へ前進するという。ここで初めて私たちの最終目的地は、トラック島だということを知ったのだった。最終目的地へ行くまでの束の間であったが、美しい島への第一歩は、心を潤すようなひとときだった。

島民はスペイン系の混血で、美人が多く、子供はとくに可愛いらしかった。島民たちは、戦争にはまったく関心のないようすで、楽しそうな歌声が風に乗って聞こえてくる。バナナ畑にはみごとにバナナが実り、あちこちから果物の香りが漂ってきた。実に信じられないほど、平和な島という印象だった。この島だけは、戦争には巻き込またくない、思わず祈った。「戦争なんて早くやめてくれ」と大声でいいたかったが、それをいってしまったえば非国民になってしまうので、ただ心の中で叫ぶしかなかった。

空を見ても、海を見ても、濁りのない美しさ、私たちはその島で、兵器や物資の陸揚げに息のつく間もなく働いた。こうしている間も、戦況はますます悪化し、いつこのサイパンにもアメリカ兵が上陸してくるかわからない状態になり、陣地の構築を急いだ。

四月二十八日、サイパンを出てトラック島へ出発と決まった時、私はたまたま、軍属でサイパ